

世界との差について、育成システム(制度)の違いが指摘されることがある。優秀な選手は決して自然発生的に生まれるのではなく、計画的に育てるものだ。日本の育成システムの多くは年代ごとで分断され、継続性及び一貫性が乏しい。また、限られたエリートだけを集めても限界があるだろう。ダイヤの原石は一つでも多い方がいい。

そんな中でもサッカーは、世界的に育成システムが充実していると言われているが、実際の現場では効率的ではないこともある。育成と一言でいっても、部活動、Jクラブ、地域クラ

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



ブおのおのがおのおの目的や考え方を持っている。それぞれの目的や考え方は否定しないが、もっと違うやり方があるのに、と思ってしまうことは多々ある。例えば、こんな仕組みはできないだろうか。各県に

Jクラブに選手を一人でも多く送り出し、強化すること。それを合言葉に各カテゴリーで指導を行えば、統一性のある育成システムが構築できる。年代が変わっても同じ目標を持つことができるのである。

成組織となるのである。各カテゴリーはチームでの活動はもちろんのこと、同時に将来のJリーガーを育てる責務も出てくる。指導者にとってもやりがいも出てくるだろう。そして、県内育成ピラミッド構造のとりま

育成にも「地産地消」

あるJクラブを頂点とし、

その他の各カテゴリーを下部組織と考える「県内育成ピラミッド構造」である。

要は県のサッカー全体を一つのピラミッド組織と考えるのである。各カテゴリーの最終目標はトップの県内

その代わりトップのJク

ラブは指導ノウハウや施設などの環境を積極的に各カテゴリーに提供して育成を支援する。必要ならば各カ

テゴリーに指導者を派遣する。さしずめ県内各カテゴリーすべてがJクラブの育

とめを県サッカー協会が後

押しする。そうなれば、わざわざ他県から選手を獲得する必要はないし、他県に

選手を送り出す必要もない。本当の意味で地元愛は強くなるし、地元選手が活躍することで地域からの支

援も増えるだろう。

今後の育成のキーワードは「地産地消」だ。地域で育て、その地域で活躍してもらおう。地元プロ選手が増えることは、必ず地元Jクラブへの愛着が増し、県内サッカー全体の底上げにつながる。

Jクラブは決して自分たちだけで選手を育成しているのではない。また部活動や地域クラブは育成においてJクラブと敵対するものでもない。育成の重要性を鑑(かんが)みればおのずと役割分担は明確化されるのである。(REGIST

A有限責任事業組合代表)

隔週土曜日掲載